

第3回「日本らしく美しい景観づくりに関する懇談会」

意見の概要

開催日時：平成26年10月27日（月）15：00～17：30

（本意見の概要はゲストスピーカー、行政も含む出席者から出た意見を掲載しています）

■意見の概要

○ロケツアーリズムと景観の関係について

- ▶ ロケツアーリズムなどをきっかけに、地域住民が外からの目線により自分たちの地域の景観の良さを気づくことができ、それにより地域が誇りを持ち、景観を保つことができる。人が多く来すぎることによる弊害を避けるため、地域でルールをつくる必要がある。
- ・観光客が大量に来ることにより地域の資源が損なわれたり、ゴミが多くなるなどのデメリットが発生する場合もある。そのため、地域で共有できるルールをつくり、良好な景観を維持し続けることにより、地域のファンを少しずつ継続的に増やすことが大切である。
- ・継続的なロケツアーリズムを進める上では、受ける側である地域の体制が整っているかが重要。単発的な流れで終わらせないように地域が努力することが大切である。

○集約型都市構造と景観の関係について

- ▶ 中心市街地や拠点地区などに集約していく場合には、総合計画、都市計画、土地利用計画などを踏まえた上で、即地的に景観を考え、景観計画を策定・実践していく必要があるのではないか。
- ・コンパクトシティを進める上で、都市の諸機能を集中させる地域（機能集約地）の景観の特徴を浮かび上がらせることを考える必要がある。
- ・都市構造を変えるには今後20～50年スパンで取組む必要があると考えられるが、都市全体や集約地の形、姿で魅力を作り上げることが大切である。
- ・都市の諸機能を集中させない地域（過疎地等）においては、例えば、四万十の文化的景観の場所などで太陽光パネルなどが設置されている等、これまでとは異なる土地の動きや予測不可能な状況が発生している。

○つくる景観形成とつくらない景観形成について

- ▶ これまでの景観形成は建築物の建築行為等を伴う「つくる景観形成」であったが、これからコンパクトシティを進める中で景観形成を考える上では、郊外部等で建築行為等を伴わない「つくらない景観形成」を考える必要がある。
- ・これまでは「つくる景観形成」を図ってきたが、これからは「つくらない景観形成」も考える必要がある。これを考えることにより、つくる景観形成も再考できると思う。
- ・空き家の除却に対して支援をする自治体も出てきており、集約型都市構造の都市を考える上で「つくらない視点」は大切である。
- ・高齢化や担い手不足により、現在の景観を維持することが難しくなっており、中山間地

域の景観保全は課題である。例えば、棚田百選などにも選ばれている中山間地域の景観においても、地域の担い手不足からその維持が難しくなっている状況はある。

- ・景観を維持することが目的となることで、生活感のない、テーマパークのような景観とならないようにすることも必要である。

○景観行政団体と広域景観について

➤景観行政団体になっている自治体となっていない自治体、都道府県の役割など、広域景観を考える上では取り組みを連動させる必要がある。

- ・中山間地域等において、地域が主体的に景観やまちづくりに取り組めないが、維持・継承すべき価値のある地域の支援等については、市町村と都道府県が連携するなどのアプローチを検討することが望ましい。
- ・市区町村が景観行政団体に移行することで、景観法上の都道府県の権限や役割が小さくなる。今後、都道府県が継続的に景観行政団体となった市町村にコミットしたり、連携できるようにすべきではないか。
- ・都道府県には、隣接する市町村間の連係や調整など、広域的な観点からの調整機能を持続的に持たせるべきではないか。

以上